15

『啓迪集』所引文献の検討

○王　鉄策・小曽戸　洋

曲直瀬道三の『啓迪集』（一五七四）は、宋元明を中心とする数多くの医書からの抜粋からなる日本近世初期の代表的医書である。その依拠するところの典籍については、道三自身が最終巻末に「所従証経籍」（以下「所従」と略）という項目を設けて書目を列挙している。点数は六四書に及ぶが、道三は『啓迪集』を書き上げてからしばらくして、巻首から再び目を通しつつ、その書目を書き出していったらしく、執筆にあたって実際に用いた図書（原則として本文中に略称一字を□に囲んで示している）とはかなりの相異があると思われる。例えば道三自身の錯覚、直接引用と間接引用（孫引き）の混乱、伝写・刊行の際の脱誤などの要素もそこに介在している。そこで従来の刊本にいくつかの古抄本を校合し、本文の引用文と「所従」の書目との関係について検討を行ったところ、いくつかの新知見を得た。以下に報告する。

『婦人良方』からの引用は「婦」あるいは「良」とすると「所従」にいっているが、本文巻八（小児篇）のみに引用される「良」の文章は陳自明（宋）の『婦人良方』（現伝本に三系統ある）に見えないものである。陳自明には『管見大全良方』の著もあるが、これは日本に伝わらなかったらしいから違う。そこで『奇効良方』と照合した結果、同書からの引用であることが判明した。『奇効良方』は全六九巻からなる明代の大部の医方書で、成化七年（一四七一）と正徳六年（一五一一）刊本がある。本書は出版後早くに日本に輸入されたことがわかっている（幻雲『史記』扁倉伝注に引用）。さらに『啓迪集』に題辞を書いた策彦周良が遣明使（一五三七・一五四七）の帰国の際、本書を明より持帰っている（齎来目録）から、道三が策彦将来品を見た可能性も高いであろう。吉田意安旧蔵の成化版や、玄朔門人の野間玄琢旧蔵正徳版も現存しており、当時その分野の医師間で活用されたらしい。『婦人良方』からの引用は本文では「婦」で統一されており、道三が別に『奇

効良方』を「良」として小児篇に引用したことは疑いない。

「全」とは「全九集」であると「所従」にいう。正式名『類証弁異全九集』には、月湖の漢文体原本（一四五二年、中国において序刊）と、道三が大幅に増訂して和文に改め、のちに刊本となったものがある。『啓迪集』における引用は漢文ではあるが、道三の改訂本に基づくことがわかった。「全」は古抄本では本文中に八回の引用があるが、刊本ではそのうち三回が「金」に誤刻されているので注意を要する。

「垣」は本文中に四回の引用があり、「所従」では「東垣十書」とされている。『東垣十書』は李東垣の著書三種ほか、計六名の作一〇書を収めて明代に作られた叢書。室町時代に熊氏梅隠書堂刊本（一五〇八）が将来され活用された形跡がある。『啓迪集』引用文は『東垣十書』には違いないが、東垣の『内外傷弁惑論』一書のみに限られる。

「所従」にはないが、巻八首に「閻」からの引用がある。これは『小児薬証直訣』の編纂者・閻孝忠を指すのであろう。同書には宋版本系、薛己注解本、熊宗立注解本があるが、『啓迪集』の引文は前二者には見られず、実は熊宗立の序文と増補部分であることがわかった。道三は熊宗立本に拠ったのである。

さらに、種々の検討を重ねた結果、「所従」六四書のうち、四七書が直接引用で、残る一七書は間接引用すなわち孫引きであることが判明した。叔和脈訣・和剤局方・霊枢・本事方・針経・千金方・銭氏小児方・広利方・海上方・子母秘録・王氏指迷方・田氏保嬰集が、それである。このうちには孫々引きもある。逆に「所従」に漏れた直接引用には先述の『奇効良方』、そして『本草序例』とがあり、「所従」に挙げない間接引用には仁斎直指小児方論・修真秘旨・活法機要ほか十数書がある。

（北里研究所東洋医学総合研究所・医史学研究部）